

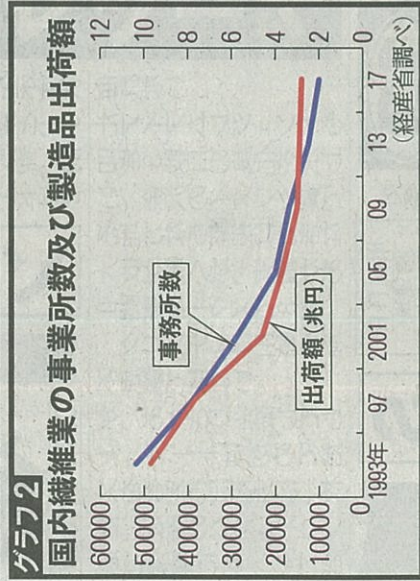
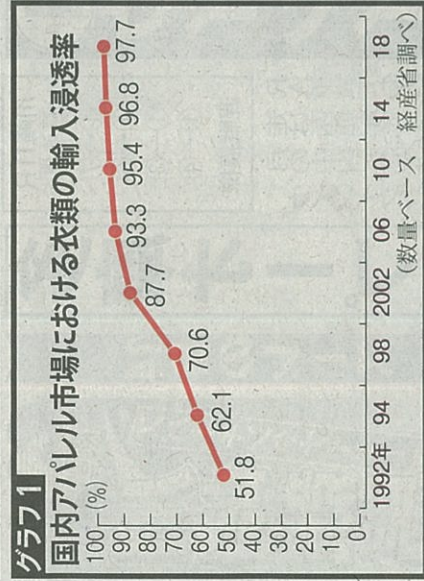


表1 丸和繊維工業
澤和章氏が個人創業の後、1958(昭和33)年、株式会社設立。ニット縫製品のOEM供給を主に事業展開。茨城県行方市に物流センター、白河市(福島県)・青森に工場を持つ。2010年に同社の縫製・パターン技術がJAXA(宇宙航空研究開発機構)の船内着に採用される。障害者向けジェーンズ「Flying Jeans」の開発なども。本社・東京都墨田区。代表取締役社長・深澤隆夫氏(顔写真)。
https://maruwa-tex-ind.co.jp/

一般的なシャツの場合



動体裁断・動体縫製の場合

同社の青森工場は現地採用による平均年齢40歳前後(全国平均は60歳台)の若い社員が活躍。離職率も低く、「多能工」を育成するシステムが整っている



「車いす利用者へ『座る前提』で作られた服はないか」との提案から生まれた「フライングジーンズ」は、ポケットの位置などにも工夫が



「これから循環型経済社会に移行していく中、『量より質』への意識の転換が進むはず。価格面でも、技術に裏打ち

「これからの循環型経済社会に移行していく中、『量より質』への意識の転換が進むはず。価格面でも、技術に裏打ち

「付加価値化がカギに」
その後も同社は「フライングジーンズ」(車椅子利用者専用のジーンズ)などを開発してきた。共通するのは一人ひとりのユーザーの要望に応え、ブランドに付加価値を付けていく戦略だ。これらの同社の活動を支えるのが技術開発・デザイン・生産までを一貫して自社運営していること。

「これから循環型経済社会に移行していく中、『量より質』への意識の転換が進むはず。価格面でも、技術に裏打ち

「付加価値化がカギに」
その後も同社は「フライングジーンズ」(車椅子利用者専用のジーンズ)などを開発してきた。共通するのは一人ひとりのユーザーの要望に応え、ブランドに付加価値を付けていく戦略だ。これらの同社の活動を支えるのが技術開発・デザイン・生産までを一貫して自社運営していること。

表2 最近の「機能性衣料」開発例

特徴	技術・素材名	開発	内容
吸湿発熱素材	ヒートテックほか	ユニクロほか	汗などの水分を吸収して発熱する繊維を用いた。2003年、ユニクロの「ヒートテック」が注目され、以後各社から新製品が続々登場
着ているだけで健康状態をモニタリングできる	hitoe	東レ NTT	ナノファイバー生地に高導電性樹脂を特殊コーティングして「スマート衣料」の一つ
自ら温度調節する服	Outlast	森永邦彦 (アンリアレイジ)	繊維に含まれるマイクログラファイトセルのバランシング機能が熱を吸収・放出し表面温度を常に30℃程度に保つ
蓄熱保温	サーモトロン	ユニチカトレーディング	特殊な糸構造のポリエステル部に、太陽光を吸収して熱エネルギーに変換する物質を練り込む



■「花形産業」が...

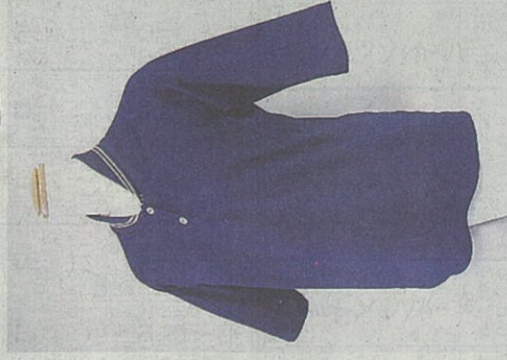
日本の繊維産業は明治時代の近代化からその主要産業として発展し、長らくその地位を占めてきた。第二次大戦後もそれは変わらず、1950年

代には輸出構成比が48.3%と輸出総額のほぼ半分を占めるほどだった。しかし60年代以降は東南アジア諸国が台頭し、73年に戦後最悪期間に渡って黒字を記録してきた日本の繊維貿易収支が初めて赤字に。さらに90年代からは中国が急成長。これらアジア諸国からの衣類輸入は90%以上を占めるまでになった。これらの原因は外国製

品との競争激化、海外移転による空洞化などが重層的に結びついたもので、現在「純日本製」と呼べるアパレル衣料は、

表に2% (1) にまで低下しているのである。グラフ1。さらに業界としての「長期低迷傾向」である。最近の不安の流れる「国内回帰」の動きも見え始めた。それを支える裏付けとなる「技術」への期待が高まっているのだ。

「動体裁断・動体縫製」の理論は機能系被服デザイナーの中澤悠(すずむ)教授が考案。2009年から同氏が氏の全面サポートを受け開発した。写真はJAXAに採用されたボロシヤツ



「量から質」への転換
「ほとんどが輸入物になった日本のアパレル製品ですが、そのせいか大量生産・大量廃棄の象徴

「量から質」への転換
「ほとんどが輸入物になった日本のアパレル製品ですが、そのせいか大量生産・大量廃棄の象徴

「量から質」への転換
「ほとんどが輸入物になった日本のアパレル製品ですが、そのせいか大量生産・大量廃棄の象徴

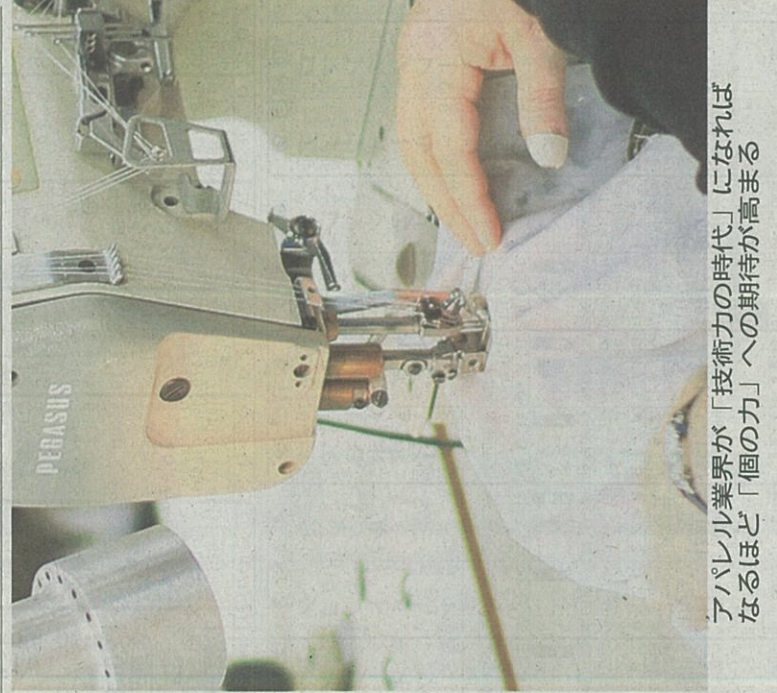


東京・両国の本社1階にある「INDUSTRY TOKYO」はショールームを兼ね、同社のブランドを一目で見ることができる

国内アパレルの逆襲

生き残り懸けて日本産の技術に活路

長年、わが国の主要産業だったアパレル業界。しかし今は、そのほとんどが輸入物に占められているという。そんななか、生き残りをかける中小企業からその状況に変化が生まれている。「『下町口ケット』アパレル版」とも言える企業に話を聞いた。



アパレル業界が「技術力の時代」になればなるほど「個の力」への期待が高まる